



文学部だより 第22号

『文学部だより』編集委員会

(Citation)

文学部だより, 22:1-8

(Issue Date)

2024-10

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100495656>



文学部をベースとした書籍の刊行

人文学研究科長・文学部長 白鳥 義彦

「最近の著作から」の欄で、文学部教員による新刊著書が紹介されていますが、文学部をベースとした書籍がいくつか刊行されているので、ここでまとめて取り上げてみたいと思います。

一冊目は『人文学を解き放つ』（神戸大学人文学研究科編、神戸大学出版会、2023年）です。本書は、神戸大学文学部70周年の企画として神戸新聞に連載された「21世紀の人文学 神戸大学文学部リレーエッセー」（2019年10月11日～2021年9月18日）をもとに、新たな原稿も加えて、それぞれの教員の研究のエッセンスをコンパクトに記した38のテーマから成っています。それぞれ4頁ほどにまとめられていて、興味を惹かれるところから気軽に読み進めることができます。専門領域を超えて文学部の教員が執筆した著書として『共生の人文学：グローバル時代と多様な文化』（共生倫理研究会編、昭和堂、2008年）がこれまでに刊行されていますが、本書はそれ以来のものです。なお本書は2022年度の文学部創立70周年記念事業出版助成を受けています。

二冊目は『日英対訳で読みひらく新しい日本文化史 A New and Open History of Japanese Culture in Bilingual Japanese-English Translation』（斎藤公太著、神戸大学出版会、2024年）です。本書はタイトルにある通り、日英対訳で、飛鳥・奈良時代から昭和戦後期・現代にまで至る十五世紀にわたる日本文化史を一冊にまとめたものです。斎藤先生が留学生担当講師として文学部で開講していた日本文化史の授業を土台にしています。執筆に際しては、文学部の国文学、日本史、美術史、中国文学の先生方のコメントも生かされています。「◎日英対訳で、留学生などさまざまなバックグラウンドの人々にも読みやすく、同時に英語で日本の文化について紹介するときにも役立つ。◎日本文化の通俗的イメージを改め、新しい学術的根拠にもとづいて執筆。◎読みやすさに重点を置いているので、日本文化の通史を改めて学びたいという社会人にも最適の書。」が本書の特徴です。単なる通史にとどまることなく論点も示されており、また読みやすい英語で書かれている点も特筆すべきです。2023年度の神戸大学の「教育における社会貢献（リカレント教育）推進助成金事業」の助成を得ています。

三冊目は『歴史の見方・考え方2：史料から広がる歴史学』（佐藤昇編・神戸大学文学部史学講座著、山川出版社、2023年）です。『歴史の見方・考え方：大学で学ぶ「考え



る歴史』（佐藤昇編・神戸大学文学部史学講座著、山川出版社、2018年）の続編にあたる本書は、日本史学、東洋史学、西洋史学の教員の各々の専門に応じて、「史料」を共通の軸に置きながら、それぞれの時代と地域の様相を描き出しています。教科書の体裁で出版されていますが、内容はかなり濃密で読みごたえがあります。

四冊目は『1%の隣人たち：豊岡発！外国人住民と共に生きる地域社会』（佐々木祐・平井晶子編、昭和堂、2024年）です。社会学研究室では豊岡を中心とする但馬地域での調査を重ねてきていますが、特に2019年から2021年に豊岡市と神戸大学の共同事業として行った「外国人住民に関する調査研究」をもとに、都市圏のみならず地方においても今日特別の存在ではなく普通に共に生きる隣人として、豊岡地域の社会や経済の重要な支え手となっている外国人住民の就労、生活、育ちを描いています。本書は2023年度の文学部創立70周年記念事業出版助成を受けています。

これら、文学部の日々の教育研究の成果を、是非手に取ってご覧いただければと願っています。

CONTENTS

研究科長 挨拶	1
研究最前線	2~3
最近の著作から	4~6
報告	6~7
近況	8



移動し絡み合う「ルーツ」を求めて—フランス語圏文学研究の魅力

廣田郷士 講師

専門はフランス語圏文学。主な業績として François Noudelmann et al. (dir.), *Archipel Glissant*, Presses universitaires de Vincennes, 2020 (共著)、『『トロピック』の戦略と詩学—イデオロギーとエコロジーの交わる地平について』、『フランス語フランス文学研究』第122号、2023年、pp. 49-64 (論文) など。

専門は「フランス語圏文学 Littératures francophones」、伝統を重んじる(?) フランス文学研究の中でも新しい専門分野です。フランス国外で創られるフランス語文学を指すことの多いこの「フランス語圏文学」は、カリブ海、アフリカ諸国、南太平洋、東南アジアから現代フランスに至るまで、広大な領土と作家数を誇る研究分野です。

世界に二億人以上の話者数を有するフランス語は、旧フランス領をはじめ世界中で広く使用されています(数年前にはフランスを抜いてコンゴ民主共和国が、フランス語話者数世界一の国にもなりました)。土着の言語の国語化を妨げる形で、あるいは(一見逆説的ですが)フランスの植民地支配に抵抗する過程で、各地でフランス語が文学の言語として用いられてきた歴史があります。フランス語圏文学は常に、「ローカル」なものとの「グローバル」なものとの係わり合いから生じてきた文学でもあります。とはいえ、離脱と移動を経験するのは、言語や人・モノだけではありません。文化や想像力、そして「ルーツ」もまた、同じように移動をします。フラン

ス語圏文学研究の現代的な魅力の一つは、様々な「ルーツ」が移り住み、互いに絡まり合い、時に妨げ合い、しかし変容しながら、そして共生しようとする、その絶え間ない動きを探ることにあります。

20世紀のフランス文学は、しばしば哲学との境界線が曖昧とも言われてきました。フランス語圏文学研究もまた、他分野との関わりとの密接な学問です(特に歴史学や人類学)。ときに国立文書館でホコリにまみれたり、またときにワールドワークで日焼けしたり。古典的な文学研究で言うところの「テキスト」には決して閉塞しないことも、フランス語圏文学研究の大きな楽しみです。筆者が一番の専門地域とするマルチニックやグアドループといったカリブ海の島々には、調査のため頻繁に足を踏み入れています。研究対象とする作家が眺め続けた熱帯の風景に囲まれて、紺碧のカリブ海に浸かり、焼けるようなラム酒を一日中浴びる…。これこそが、筆者にとってのフランス語圏文学研究の最大の醍醐味です。



社会的ジレンマ

ターン有加里ジェシカ 助教

社会心理学。主な業績として、"Social rewards in the volunteer's dilemma in everyday life" (*Asian Journal of Social Psychology*, 第25巻、2022年)や "Who incurs a cost for their group and when?" (*Personality and Individual Differences*, 第185巻、2022年) など。

人間は、社会の中で協力しあって生きています。その中で、社会の皆が使う道路や公園や街灯を作ったりします。このように皆で協力して皆のための財を生み出すことは可能ですが、それは必ずしも簡単なことではありません。例えば、町の人々からお金を集めて街灯を設置するとき、たくさんいる人のうち1人だけがお金を納めなくても街灯は設置できます。そして、そのお金を納めなかった人も、町の街灯の明るさを楽しむことができます。そうかといって全員がお金を納めなければ、町に街灯が立ち並ぶことはありません。このように、個人にとって短期的に利益のある行動(上の例では、お金を納めないこと)と、社会の皆にとって利益のある行動(上の例では、街灯設置のためにお金を納めること)が一致しない状況は、「社会的ジレンマ」として社会科学の諸分野で研究されてきました。

これまでの研究では、社会的ジレンマにおいて、どうすれ

ば集団内の全員の協力を引き出せるのかが主に検討されてきました。それに対して私の研究では、社会的ジレンマの中でも、必ずしも全員が協力する必要のない状況に注目しています。例えば町に街灯を設置する際、資金面では全員の協力が必要かもしれません。しかし、街灯設置の計画の策定においては、町の全員が携わる必要はなく、わずかな数の人が携われば十分でしょう。このように全員の協力が必要ないとき、「それでは誰が皆のために行動するのか」という難しい問題が新たに生じます。この問題に対して、人々はどのような解決策を公平だとみなし、実際にはどのように解決しようとするのでしょうか。私はこれまで調査や実験を通じてこの問いを検討してきました。将来的に実社会の社会的ジレンマに対して意義のある示唆を提供できるよう、今後も検討を重ねていきます。



学芸員から教員へ 作品と研究をめぐる環境の変化がもたらすもの

野田麻美 講師

日本の近世絵画、主な業績には編著の『朝川図と蘭亭曲水図—イメージとテキストの交響』（勉誠出版 2023年5月）、編著の『幕末狩野派展』（静岡県立美術館 2018年）など

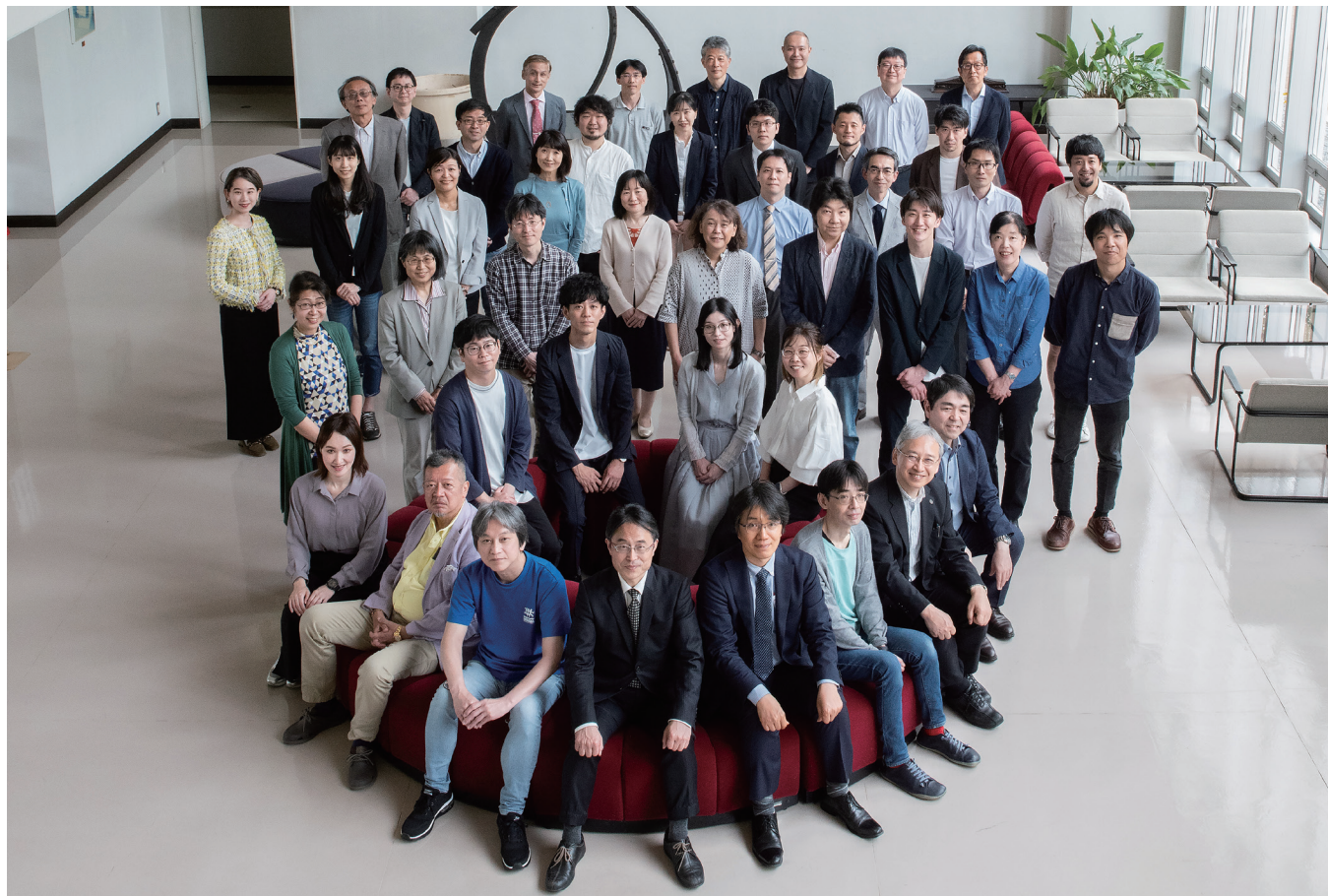
2023年4月に神戸大学に参りました。本当に、あっという間に1年が過ぎました。学芸員として13年勤めた後、教員としての初年度を迎えた2023年は、私にとって激動の1年でした。

まず、毎週授業の準備をするなかで、10年以上放置していた、室町～桃山時代の狩野派について、考察しました（私の現在の主たる研究テーマは江戸狩野派で、桃山の狩野派とは全く違う集団です）。論文講読のために、美術史のさまざまなジャンルにおける最新の成果を確認する（あまりできなかったですが…）、学生が発表するジャンルの最新の研究を確認する（これもあまりできなかったですね…）、そのほかの授業準備もあり、久々に「美術史」の輪郭を掴むような作業をしたように思います。次に、本務と兼務の形で、前職の静岡県立美術館で開催された「大大名の名宝—永青文庫×静岡県美の狩野派」展を担当した関係で、図録原稿執筆の為に、細川家のコレクションについて研究したり、静岡県美の狩野派作品の研究を深めたりといった作業をしました。学芸員として最後の仕事だと思うと、一つ一つの作品研究に、自然と

力がこもりました。そして、10年来の江戸狩野派関連の論文をまとめた博士論文の、60万字に及ぶ文章の修正作業もしました。この作業は本当に辛く苦しいもので、大学業務と展覧会業務に挟まれ、深夜に毎日、少しずつ進めました。

昨年度、これらの研究が、日々私のなかで伸縮を繰り返したことで、いま、私の関心や作品との向き合い方を深め、豊かにしてくれているように思います。美術史の場合、作品を見て、誰も気づかなかったことを鋭く見抜く「眼の力」が求められますが、展覧会業務でそれが先鋭になる一方、それを言葉にし、作品を歴史のなかに位置付けるためには、作品から少し離れ、思考を重ねる必要があります。大学での業務と展覧会業務の両極と、それを強引に相対化する博論の執筆・修正作業がトライアングルをなし、これまでにない美術史研究のダイナミズムを肌で感じることができました。

この経験を活かし、今年度以降、巨視的な視点と微細な分析から、江戸狩野派250年の史的展開を、狩野派400年の活動のなかで相対化することを試みたいと思います。



松田毅、藤木篤、新川拓哉編『応用哲学』 昭和堂 2023年11月

哲学と社会の接点にある問題群が幅広く平易に論じられており、神大文学部に所属（していた）教員からの寄稿も多い。新川は第九章で人工的に「主体」を創り出すことは可能なのか、それは倫理的にどのような意味をもつのか、といった論点について主に概念的な明確化を行った。（新川拓哉）



ダニール・ハルムス著 増本浩子、ヴァレリー・グレチュコ訳『ハルムスの世界』 白水社 2023年8月

ロシア・アヴァンギャルドの作家ダニール・ハルムスの短編集。スターリンに粛清されたハルムスの作品は、ペレストロイカによってようやく公に出版されるようになり、以後ロシアのみならずドイツやフランス、アメリカでカルト的な人気を誇っている。ハルムスの作品を理解する手掛かりとなるコラムと、詳細な解説付き。本書は 2010 年に出版した翻訳の増補改訂版で、初版千部が発売開始後 1 週間で売り切れるという稀有な経験をしました。（増本浩子）



Lucas Marco Gisi, Irmgard M. Wirtz (Hg.): *Wirklichkeit als Fiktion – Fiktion als Wirklichkeit. Neue Perspektiven auf Friedrich Dürrenmatt.* Wallstein 2024年1月

20 世紀スイスのドイツ語文学を代表する作家フリードリヒ・デュレンマットの生誕 100 周年を記念して、2021 年にベルンで開催された国際会議の成果をまとめた論集。増本は日本語翻訳者として招かれ、フランス語とブルガリア語の翻訳者とともにデュレンマットの戯曲を翻訳する際の困難について語ったが、その鼎談が収録されている。世界の主要なデュレンマット研究者が一堂に会した稀有なイベントだったのに、コロナ禍でオンライン参加となり、悔しい思いをしました。（増本浩子）



Aliocha Wald Lasowski (dir.), *Imaginaire et politique de la créolisation : Édouard Glissant et nous,* Éditions de l'Aube 2023年6月

カリブ海の伝説作家であるエドゥアール・グリッサンをめぐるインタビュー集。編者アリオシャ・ヴァルド・ラゾウスキが聞き手となり、欧米各国からアフリカ・アジアまで、総勢 35 名の作家・思想家・政治家・研究者らが、それぞれの立場からグリッサンの思想のアクチュアリティを議論する。日本からは廣田のほか、作家のミカエル・フェリエ氏が参加。廣田は日本におけるグリッサンの需要とその思想の可能性について語っている。（廣田郷土）



佐藤昇編、神戸大学文学部史学講座著『歴史の見方・考え方 2 史料から広がる歴史学』 山川出版社 2023年10月

神大文学部史学講座（日本史、東洋史、西洋史）の教員が総力を結集した『歴史の見方』の第二弾。歴史の情報源である「史料」にはどのようなものがあるのか。いかなる視点から分析が可能なのか。そこからどのような歴史像を描くことができるのか。古代ギリシアのスポーツから中世エジプトの女王、近代日本の検閲など、多様なトピックに関わる具体的な史料を読み解き、歴史学の作法と広がり、そして可能性をわかりやすく解説する。（佐藤昇）



大黒俊二他編『岩波講座 世界歴史 第2巻 古代西アジアとギリシア ～前1世紀』 岩波書店 2023年11月

岩波講座世界歴史シリーズの第2巻。最新の研究成果に基づき、古代西アジア世界（オリエント、エジプト）および古代ギリシア世界の全体像を提示するとともに、国家、宗教、ジェンダーなど、主要な論点について紹介、分析を行っている。私は「問題群：古代ギリシアのポリス」を執筆し、古代ギリシア世界に林立したポリス（都市国家）とはいかなる性格の政治体であったのか、暴力装置、財政、宗教といった観点から論じた。（佐藤昇）



Hideki Kishimoto, Osamu Sawada, and Ikumi Imani (eds.), *Polarity-Sensitive Expressions: Comparisons Between Japanese and Other Languages,* De Gruyter Mouton 2023年12月

人間言語には、肯定文か否定文かのどちらかでしか用いることができない「極性表現」と呼ばれる表現が存在する（例えば、「少し」は肯定文でしか使えず、「何も」は否定文でしか使えない）。本書は、統語論、意味論、語用論、心理言語学、歴史言語学の観点から、日本語の極性表現について、他の言語（英語、ドイツ語、スペイン語、古代日本語など）と比較しながら探求し、人間言語の多様性と普遍性に対し新たな知見を提供している。（澤田治・岸本秀樹）



佐々木祐・平井晶子編著『1%の隣人たち：豊岡発！外国人住民と共に生きる地域社会』 昭和堂 2024年6月

2019-2021 年度にかけて豊岡市と共同で実施した外国人住民調査の結果に基づき、地域社会独自の社会編成を踏まえながらそこに生きる外国人住民と地域住民との関係を描きだすことを試みた。就労・生活・育児・教育といった観点から、統計データと聞き取りデータを活用しながら具体的な実践の様相とその可能性・課題を明らかにした。外国人非集住地ならではのユニークな取り組みが分析されているだけでなく、他地域の事例分析にも援用可能な視点が多く含まれている。（佐々木祐）



徳田剛・二階堂裕子・魁生由美子編『地方発 多文化共生のしくみづくり』
晃洋書房 2023年10月

人口減少が進む一方で外国人住民が増加の一途を迎える日本の地方部において、より望ましい形で外国人の受け入れと共生のための「新たなしくみづくり」を構想するため、日本各地での様々なアクターによる取り組みと、諸外国の事例を踏まえて、多文化共生のための「標準装備」について考える一冊。梅村は第7章「地方部の製造業と外国人労働者」（共著）、第18章「ドイツの「移民政策」」を担当した。（梅村麦生）



宮下規久朗『バロック美術—西洋文化の爛熟』
中央公論新社 2023年10月

17世紀を中心に花開いたバロックの建築・彫刻・絵画は、豪華絢爛で躍動感あふれる表現を特徴とする。時代ごと地域ごとではなく、7つのテーマに沿ってバロック美術の本質を読み解いた。日本では意外なほどバロック美術の入門書はなかったが、本書は入門書であると同時に近年の美術史学の成果を盛り込んだ学術書となっている。新書には珍しく、カラー図版を200点以上収録したため、手に取ってご覧いただければ幸いである。（宮下規久朗）



宮下規久朗『日本の裸体芸術—刺青からヌードへ』
筑摩書房 2024年1月

裸体が芸術となったヌードと、裸体の上に施された芸術である刺青とはどのような関係にあるのかという問題意識から、2008年に『刺青とヌードの美術史』（NHK ブックス）という本を書いた。それから16年たち、今回この本を文庫化するに当たって増補改訂し、最近のヌードと刺青にまつわる話題も加えてアップデートをはかり、さらに木下直之氏のすばらしい解説もいただいた。身近なヌードについて考えるきっかけになれば幸いである。（宮下規久朗）



宮下規久朗『食べる西洋美術史—「最後の晚餐」から読む』
光文社 2024年2月

西洋美術には飲食や食材を扱った作品が非常に多いが、西洋以上に食に貪欲であった中国など西洋以外の文化ではそのようなことはなかった。西洋では、飲食と美術、さらに宗教が深く結びついていたのである。本書は美術と食との関係について考えた初めての書で、食という観点から西洋美術の特質に迫った。2007年に刊行され、翌年韓国でも翻訳出版され、本書に基づく展覧会もいくつか開催されたが、今回文庫化するに当たって加筆修正した。（宮下規久朗）



小田部胤久・宮下規久朗『西洋の美学・美術史』
放送大学教育振興会 2024年3月

2024年から放映されている放送大の教科書。前半の西洋の美学を東大教授の小田部氏、後半の西洋の美術史を私が執筆したが、一切打ち合わせせずに各々が執筆し、両者は完全に別個のものとなっている。美術史は時代順や地域別ではなく、「聖母と美術」「幻視と召命」「死と追悼」「飲食と食材」「性と裸体」「自然と人間」という7つのテーマで論じ、西洋美術の特質を考えている。テレビでもご覧いただければ幸いである。（宮下規久朗）



野田麻美編著『大大名の名宝 永青文庫×静岡県美の狩野派』
静岡県立美術館 2023年10月

静岡県立美術館で開催された展覧会図録。永青文庫は大大名・細川家のコレクションを保存管理する美術館で、室町時代から江戸時代の狩野派コレクションの優品を擁する。一方、静岡県美は開館以来狩野派作品を核にコレクションを形成してきた。両館のコレクションを掛け合わせることで、狩野派400年の軌跡を迎える展覧会の作品を一点一点詳細に紹介する図録である。（野田麻美）



国文学研究資料館編『粉本画像を読み解く—麻布一本松狩野家資料への多角的アプローチ』
国文学研究資料館 2024年3月

国文学研究資料館による国際共同研究プロジェクト「麻布一本松狩野家資料に関する画題の国際化のための基盤研究」の成果報告書である。麻布一本松狩野家資料は東京藝術大学に伝来した江戸狩野派の表絵師・麻布一本松家の模本類で、江戸狩野派の模写を考えるうえで貴重な資料群である。執筆者は「麻布一本松家模本と木挽町家模本—図様と表現をめぐる」において、麻布一本松狩野家資料の江戸狩野派模本としての特徴について明らかにした。（野田麻美）



吉田容子・影山穂波編『ジェンダーの視点でよむ都市空間』
古今書院 2024年5月

「ジェンダー」研究については、空間や場所、地域社会の研究を深めてきた日本の地理学からも、多数の研究実績が積み上がっている。「都市空間」をテーマに、労働、地域社会、ケア・サービス、視覚表現などの論点を考察した全12章構成。日本のジェンダー地理学の全体像を俯瞰できる1冊。原口は「第6章 ジェンダー化された空間の生産—寄せ場・釜ヶ崎はどのようにして形成されたのか—」を寄稿した。（原口剛）



酒井朋子・奥田太郎・中村沙絵・福永真弓編『汚穢のリズム——きたなさ・おぞましさの生活考』
左右社 2024年1月

汚穢（きたないもの、おぞましいもの）にかかわる体験や、それを避けようとする人間の行動を掘り下げ、人類学・倫理学・環境社会学などの視点から考察する。研究者 11 名とアーティスト 3 名によるエッセイとインタビュー。原口は「嗅ぎわける——嗅覚の地理」を寄稿し、また社会学（博士課程後期課程）のオスカー・レン氏が「もつれる——雑草との共生と競争」「のぞきこむ——農業危険物との遭遇」を寄稿した。（原口剛）



岡野翔太（葉翔太）、『二重読みされる中華民国——戦後日本を生きる華僑・台僑たちの「故郷」』
大阪大学出版会 2023年12月

「台湾系華僑」とは誰か。そこには台湾出身者だけでなく、中華民国が中国大陆を統治していた 1949 年までに来日し、日中国交正常化後も中華民国のパスポートを所持する（していた）人びとも含まれます。かれらは戦後の日本を生きながら、日本を取り巻く政治・外交情勢と「二つの中国」に翻弄されてきました。日本の「台湾系華僑」の多層性を理解する上で有益な一冊となるでしょう。（岡野翔太）



斎藤公太『日英対訳で読みひらく新しい日本文化史』
神戸大学出版会 2024年3月

本書は神大文学部・人文学研究科の留学生向け授業をもとにした日本文化史の入門書。特徴の一つは日英対訳で書かれていること。そのため、日本文化を英語で説明するときにも手引きとして使うことができる。もう一つの特徴として、できるかぎり新しい学術的研究の成果を反映させ、同時にわかりやすさも心がけた。こうした特徴を持つ本書は、「日本文化」について学び、考えるための入口となる一冊といえる。（斎藤公太）



2023 年度の神戸雰囲気学研究所

久山 雄甫

神戸雰囲気学研究所は、2022 年に人文学研究科の若手教員有志を中心として設立されました。まだまだ 2 歳になったばかり、よちよち歩きの研究所ですが、分野横断性と文化横断性をモットーに、新学術領域「雰囲気学」の創出と展開を目指して活動してきました。以下、2023 年度の成果をご紹介します。

まず、海外でふたつの国際シンポジウムを共催しました。ひとつは 2023 年 6 月にスロベニアで開催された「呼吸哲学」シンポジウムです。雰囲気と空気と呼吸（息／生氣）をめぐる議論を通して、身体論・メディア論・環境学など多岐にわたる重要課題が見えてきました。もうひとつは 2024 年 3 月に台湾で開催された「気・氣・氣」をめぐるシンポジウムです。今後も台湾の中央研究院と、東アジア内部の多様性をふまえた共同研究を行っていく予定です。

2023 年 12 月から翌年 2 月にかけてはローマ・トル・ウェルガータ大学のトニーノ・グリッフェッロ教授を客員教授として招聘しました。文学部・人文学研究科で複数回の特別授業を開いたほか、綿密な共同研究を行い、その成果をふまえて二度にわたる国際シンポジウムを開催しました。ひとつは建築と都市の雰囲気（Atmosphere in Architecture and Urban Design）を、もうひとつは雰囲気学の文化横断性（Cross-Cultural Possibilities of Atmospheric Studies）をテーマとしたものです。グリッフェッロ教授とは今後も互いに協力して雰囲気学を展開していく予定です。

島津製作所との共同事業も進んでおり、「島津・KOIAS レクチャー」を 2 回、京都の島津製作所本社にて開催しました。2023 年 10 月には神戸雰囲気学研究所を紹介する第 1 回レクチャーを行い、今後の共同事業のメインテーマを「デザインと雰囲気」に決定しました。2024 年 3 月には、江戸時代の和本にみるデザインと雰囲気をテーマにして第 2 回レクチャーを実施しました。

福島県の郡山市立美術館とのコラボレーションも実現し、展覧会「雰囲気を展示する」（2024 年 1 月 30 日から 4 月 21 日まで）を共同で企画しました。2024 年 3 月には KOIAS のギャラリートークを行いました。なお、この間、KOIAS 内部で「KOIAS アートプロジェクト」が立ち上がり、今後はアートを一つの軸にして活動を展開していくことになっています。

その他、国内外での口頭発表、翻訳書や論文の公刊など、多くの成果がありました。2024 年度からの神戸大学「先端的分野共創研究プロジェクト」にも採択され、ますます活動の輪を広げていきたいと思います。関心を持ってくださった皆さん、ぜひ公開講演会などにお越しください。



国際会議 INTERFACEing 2023

増本 浩子

2023年9月25日から27日までの3日間、人文学研究科主催で国際会議 INTERFACEing 2023 を開催しました。INTERFACEing は国立台湾大学、トリア大学（ドイツ）、神戸大学の協力のもと（この3大学は相互に協定校です）、人文系ヨーロッパ研究者が集い、世界的なネットワークを構築する場として、2021年に始まった国際会議です。発表者は開催後に国立台湾大学が発行する電子ジャーナル *Interface: Journal of European Languages and Literatures* に投稿できるシステムになっています。第1回大会は2021年に国立台湾大学で、第2回大会は2022年にトリア大学で開催されました。

第3回となる神戸大会は“Changing Paradigms: Humanities in the Age of Crisis”を全体テーマとして掲げ、21か国から70名が参加して、英語・ドイツ語・フランス語・イタリア語・ロシア語の5言語で研究発表を行いました。25日・26日の両日、ヘンリーケ・シュタール教授（トリア大学）と



アンヌ・ソヴァニャルグ教授（パリ・ナンテール大学）による招待講演と分科会があり、25日にはジョージアで最も権威ある文学賞の受賞者ルスダン・ゴルギラゼ氏による講演も行われました。最終日の27日にはドイツ語とロシア語のバイリンガル詩人ダニエル・ユリエフ氏による朗読会の後、菊正宗酒造記念館を見学しました。3日間を通じて和気藹々とした雰囲気の中非常に活発な議論が行われ、会議はネットワーキングの場としても十分な機能を果たしました。

国際会議開催にあたり、神戸観光局・神戸コンベンションビューロー、神戸大学ジャンモネ CoE から多大なご支援をいただきました。この場を借りてお礼申し上げます。また、開会式で神戸大学を代表して挨拶してくださった喜多隆副学長（研究・社会共創・イノベーション担当）、菊正宗で専門的な内容をわかりやすく解説してくださった科学技術イノベーション研究科の吉田健一教授にも心より感謝いたします。



KOJSP の活動報告

KOJSP には、現在 2023 年 10 月に来日した 12 期生が 8 名在籍しています。今期は、コロナ以前に行っていた活動を少しずつ再開しています。11 月にバスツアーで淡路島に行き、人形浄瑠璃を見たり染め物体験をしたりしました。1 月はホームステイや山本能楽堂での能楽体験、2 月は島津製作所の創業記念資料館見学などを行いました。大学内での学びや交流に加え、大学外でもこのようにさまざまな機会を作り、日本に来たからこそ経験できる活動を行っています。

そして、二学期目となる 2024 年度前期から、この一年



間の集大成となる修了論文の作成が始まりました。学生たちは各自でテーマを決め、文学部の教員から指導を受けながら、独自の研

大河内 瞳

究を進めています。研究の成果は、2024 年 8 月の修了発表会で披露されます。また、グローバル・アクティブ・ラーニングの授業では、神戸大学の学生たちと一緒に広島に行き、広島平和記念資料館を見学したり、被爆者の語りを聞いたりした上で、広島在住の方々とディスカッションをして平和とは何かについて考えました。並行して、13 期生の受け入れの準備も進んでおり、来期は 10 名の学生を受け入れる予定になっています。



現代中国研究 47 年

緒形康

私は中国の改革開放をリアルタイムで見聞した世代に属する。1978 年、大学後期の専攻をアジア研究に決めた冬の演習で、『人民日報』1 面に載った 11 期 3 中全会コミニケを読んだ。85 年と 86 年は中国の言論界が空前の自由化を経験した 2 年として忘れ難い。それだけに、89 年の六四天安門事件では足元が崩れ落ちるような衝撃を受けた。

1993 年から 94 年まで北京の社会科学院で研修する機会があった。中国は、鄧小平の南巡講話をきっかけに自由化へともう一度舵を切っていた。大学や研究機関が海外に大きく門戸を開き、私のような駆け出しの研究者も、著名な言論人と面談のアポがすぐに取れた。帰国後、当時の勤務校で現代中国に関する新しい雑誌を創刊する計画が持ち上がった際、私はこのときの経験を基に、中国現地で直接取材した座談会を毎号、巻頭に掲げる案を出した。97 年から 2001 年にかけて、何度も大陸に飛び、北京の街を飛び回って、多くの言論人と討論を重ね、記事を書いた。

神戸大学に赴任したのは、中国が WTO に加盟した直後の 2002 年である。それから 10 年、世界における中国のプレゼンスは拡大を続ける。中国と我々の世界がまもなく一つの価値観で結ばれると信じて疑わなかった。だが 12 年 2 月 6 日、重慶市副市長・公安部長の王立軍が成都のアメ

リカ大使館に逃げ込む事件を知ってからは、その確信が揺らぎ始めた。この事件が発展して、同じ年の 3 月 19 日、政法委員会書記の周永康による胡錦濤、温家宝、習近平を標的とした未遂クーデターが起こる。中国の政局は一挙に流動化し、改革開放を推進した鄧小平、江沢民、胡錦濤の側近に対する習近平の攻撃が強まった。18 年 3 月 11 日の中国憲法改正は、その必然的な帰結と言えるだろう。1983 年以来的の国家主席・副主席の 2 期 10 年任期制が撤廃され、中国政治体制は最高指導者の終身制への道を歩み始めた。1978 年の改革開放に始まる自分の中国研究がまるで無に帰したかのようであった。これから中国はどこに向かうのか。その答えを探しあぐねるうち、定年を迎えることになった。

退職後は、午前を中国関連情報の収集に充てている。厳しい言論統制で既存の大陸メディアに見るべきものはない。反面、世界の華人たちの SNS の世界で、中国の現状と未来に関する議論は空前の活況を呈する。それらの見出しと日付を丹念にメモしながら、誰が、どのようにして、この冬の時代に風穴を開けるかを注視している。1980 年代の言論界の眩しい輝きを知る者には、中国の思想空間がこのまま死滅するとはとうてい思えないからである。

神戸大学での 27 年間と、その後のこと

喜多伸一

私は 1997 年 4 月から 2024 年 3 月まで神戸大学の心理学研究室に勤務しました。2024 年 3 月 23 日に行った最終講義では、27 年間の在職期間を振り返り、次の 3 つのことについて話しました。

(1) 心理学研究室を、研究し人材を育成する組織に変えた

神戸大学に着任した 1997 年は、日本の大学で大きな改革が進行していた時期でした。1990 年代後半に旧帝国大学を中心に大学院重点化が進み、博士課程に在籍する学生数が増え、2000 年代半ば過ぎから激しい就職難が起きました。この変動に対処するため、私は学生と教員が連携して研究を進める体制を構築しようと試みました。盟友は 1998 年に赴任した唐澤穰先生でした。唐澤先生や私が指導し博士課程に在籍し修了した学生は、次々と学術振興会特別研究員となり、現在は国内の代表的な大学や研究所で活躍しています。一方、変動に対処しなかった教員の指導学生はほとんど全て研究の世界から姿を消しました。去り際に「プロになりたかった」とつぶやいて涙を流していた学生の姿を、今でも鮮明に覚えています。救い出せなかったことが心残りです。

(2) 実験心理学と情報科学を連携させ研究を進めた

情報科学との連携は、私が 1980 年代に ATR 視聴覚機

構研究所の研究員であったことに端を発します。それ以来私は、学会運営や論文誌編集を行うとともに、例えばバーチャルリアリティを用いた心理学実験において、実験心理学と情報科学が連携する研究を進めてきました。また行政においても中央官庁の委員としてこれらの分野の連携体制構築に努め、大阪大学吹田キャンパスにある脳情報通信研究センターの設立にも関与しました。

(3) 感覚と認識の知見に基づき視覚障害の研究を進めている

情報科学との連携と並行し、視覚障害の研究を医学や工学の研究者と協力して行い、また退職後の現在も行っています。視覚心理学の研究対象は、色、動き、奥行きなどの見え方に関することが多いのですが、研究がある程度進むと重箱の隅をつつくような話になりがちです。それではつまらないので、私は「見てわかるとはそもそもどういうことなのか」という原理の解明を目指し、見えない、ないし見えづらい生活を送っている視覚障害者を研究対象に選びました。基礎研究と社会福祉の両方を含むテーマで、障害当事者との信頼関係を構築する必要がありました。幸い、多様な方々の協力を得るに至り、在職期間最後の数年間から退職後の現在にかけて研究を進めています。